



ようやく私の出番がやってまいりました。私は過日イタリアの「Madrigale(マドリガーレ)」に興味を示し「演出家・カウンターテナー・その他諸々」クラシック界でご活躍の彌勒忠史氏の講義を受けに行ってまいりました。氏は「家は古いけれど、このドアだけは新しいね。まだ 200 年しか経っていないから」と平然と言うほど深〜い歴史を持つ、かつてエステ家が栄華を誇ったフェッラーラの文化大使としてイタリア文化普及に貢献させられて... いえ音楽を愛してイタリア歌曲を広めておられます。

私は「クリスマスに何か聴きたいな」「カウンターテナー?クリスマスにピッタリ!」で彌勒氏のコンサートを発見して行ってからイタリアの古典歌曲が好きになりました。講義を聴きに行く前に比較的予習を怠らない私は、その日のテーマ「Dissi a l'amata mia lucida stella (私の愛しい輝く星に告げた)」の詩の意味を調べ、コーラスのフィルムも見ました。しかしそこで得られるのはあくまでも上辺だけ。そこに現地をよく知った人の血の通った風土的知識を加えることで得られるものは大きいと思います。「マドリガーレとは女々しい男を歌った明るい曲調の歌」としか思っていませんでしたが、話を聞いて大分印象が変わりました。特に音画の話は面白かった!お~それ見よ、歌の中の秘密発見でした。miào

## ■マドリガーレ(Madrigale)

❖ 16 世紀以降イタリアで生まれた**多声世俗歌曲**のこと。

イギリスに伝えられて独自の発展 (マドリガル madrigal) を見ました。

世俗曲=宗教曲でないもの。(逆に言えば宗教曲でないものは世俗曲)  
使用歌詞によって宗教曲か否か判別できるそうです。

【例: Amor という単語はキューピッドの別名として世俗曲に使用される】

❖ イタリア文学史上に名を遺した著名な詩人の詩に、当時の人気作曲家(宮廷音楽家)が曲を付けた歌。もともと西洋の音楽は教会か宮廷から生まれたので、その高級感をもって新規に作られた貴族による貴族のための音楽です。

❖ ルネサンス・マドリガーレ(後期ルネサンス 1500 年代に流行)からバロック(新文化誕生期)へ。イタリアを中心に壮大なバロック様式が誕生した 16 世紀後半~17 世紀初頭。その時期に活躍した Giulio Caccini の「Amarilli mia bella (私の美しい人)」というマドリガーレがよく知られています。この時代、男性の失恋が歌になり、恋の悩みが厭世的に歌われました。1840 年代のヴェネチアでは、貴族でない一般の富裕層の音楽会も始まりました。

## ■チャッコーナ Cacona

フランス語ではシャコンヌ(Chaconne)、スペイン語ではチャコーナ(Chacona) 特定の低音・和声進行を繰り返す手法。スペイン、ポルトガルなどの強国が南米を攻めるときに同時にその地に入った音楽が、現地のリズムと融合して逆輸入されたという説もあります。

時は 17 世紀のイタリア。教会で演奏したいけれど世俗曲では許可が下りない。それならとタイトルを変えて堂々と宗教曲として演奏してしまったという逸話もあるそうです。

## ■中世イタリアの本

恐るべきことに、本の内容全体どころか初めの要約文さえ韻を踏んでいたそうです。「Dissi a l'amata mia lucida stella (私の愛しい輝く星に告げた)」も 2、3 行目・4、5 行目・6、7 行目と 3 カップル仲良く韻を踏んで、各行の音数は 11・7・7・7・7・7・11 とそろっています。この 11 音節はエンデカシッラボ (endecasillabo) といって優雅な響きを持つそうです。中世イタリア貴族の「美」を求める文化は半端ではありませんね。

Dissi a l'amata mia, lucida stella  
Che più d'ogn' altra luce,  
Ed al mio cor adduce  
Fiamme, strali e catene,  
Ch'ogn'hor mi danno pene:  
"Deh! morirò, cor mio.  
Sì, morirai, ma non per mio desio."

## ■ 「Dissi a l'amata mia lucida stella (私の愛しい輝く星に告げた)」の中の言葉と曲の秘密

👉では詩人は言葉にどんな意味を込めたか？

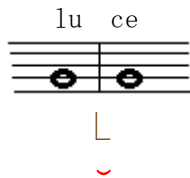
イタリア語では単語本来の意味の他にいろいろな「含みの意味」があるそうです。以下のように。

**Luci(単数 luce)光**…愛しい人の瞳を表す ♡君の瞳は百万ボルト？メッチャ光ってるぜ。

**cor mio** 私の心…自分の心の他「私の心にある愛しい人」を表す。♡君こそ僕の心の全てさ。

**Morirò** 死ぬ…命の終わりの他、快樂の絶頂を表す。♡嬉しさが最高潮！（としか書けません）

♪では作曲者はこの感情をどのように音に表したか？



**luce(光)**という歌詞 (愛しい人の瞳の意味を含む)

この音符、目玉に見えませんか？下に鼻と口を書いてみれば... ね？

このような表現を「音画」というそうです。

作曲家は楽譜というキャンバスに音符で絵を描いていたのですね。

**Fi am — me**

**Fiamme (炎)** という歌詞



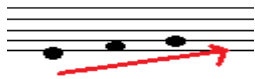
音符に沿って赤い線を引いてみると炎の揺らめきに見えませんか？

まあ、心模様は…どうでしょうか？

こんな風に音符を曲線で辿ってみると形状イメージが存在します。作曲家が絵を描くなんてちっとも知らなかったニヤアと感心したところで、**驚くなかれ！**

**mo ri rò**

**morirò (死ぬ)** という歌詞



えっ？息も絶え絶えのはずなのに音は沈まずに上昇するの？

つまりこれが「死にそうだけれど嬉しい」という微妙な恍惚感だそうです。

僕死んじゃいそう。だけどこの恋の感覚心地良いなあ～。

「死をも楽しみとして捉える」というような表現だそうです。

♫では歌手はその感情をどのように歌ったらよいか？

名詞より形容詞が大事だそうです。愛するあなた 輝く星

名詞という物体に命を吹き込む形容詞に「感情を込めて」心の丈を伝えてください。

👉では恋とはどのようなものか？

詩の中の **Fiamme (炎)**、**strali (矢)**、**catene (鎖)** は恋の詩の定型句。情熱の炎、ハートを射る矢、身も心も束縛する鎖。内包する意味はいずれも身を傷つけるもの。したがって恋とはわが身を傷つけるもの。しかし傷つき死にそうになっても、気持ちは陶酔の域に達するもの。

■人類史上始まって以来不変の「恋」は、時代を超える普遍性を持っています。

👉ではマドリガーレのどこに貴族の高級感が現れているのでしょうか？

私論ですが「厭世的な美的言葉に即した絵画的音符配列によって貴族の教養の深さを上品に表した」のではないのでしょうか。これは音楽を「教養」として捉えた貴族の「わかる人にはわかる。わかる人だけにしかわからない（高貴なものにしかわからない）」という感覚のように思います。

彌勒忠史著『イタリア貴族養成講座』（集英社新書）に、**特に音楽は『貴族のたしなみとしてもまず習得すべき学問であった』『しかし貴族にとっての「たしなみ」は純粋な「たのしみ」でもあった』**とありますが、貴族たちは必須教養として音楽を捉えながらも、風のように揺らめく多声が重なり合うマドリガーレという音楽の中で恋の感情を楽しんだのではないのでしょうか。純粋に人間として。

(では最後に早口でどうぞー**楽しくたしなむマドリガーレ**—2012.9.10 記)